# ABIC 国際社会貢献センター Information Letter

No.30　2011年3月


**政府機関関連への協力**

JICAシニア・ボランティア活動での副産物とは…？ …… 2

タイの学生に日本企業文化を伝える …… 3

「タイ加工食品産業マネジメント」研修に講師として参加 …… 4

**プロジェクトの受託**

多文化共生へ向けての定住外国人（ブラジル人）子女の教育 …… 5

**教　育**

「アジアの中の中東－経済と法を中心に」の研究成果報告会
なぜ今、中東なのか？　－日本・中東・世界 …… 7

アジア経済研究所開発スクールでの講義 …… 8

埼玉県加須市立北川辺東小学校で国際理解講座を開講 …… 9

「ブラジルについて」
—ブラジル社会で一番尊敬され、信頼されている日本人—

「世界大発見」
—子供たちに日本の良さと夢と希望を—

**留学生支援**

東京国際交流館での書き初め指導 …… 11

**事務局だより**

国際協力キャリア総合情報サイトの紹介 …… 11

会員入会のお願い …… 12

法人・個人正会員／賛助会員／活動会員一覧 …… 12



**特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）**
**Action for a Better International Community**

http://www.abic.or.jp

〒105-6106 東京都港区浜松町 2-4-1
世界貿易センタービル 6 階 ㈳日本貿易会内
Tel : 03-3435-5973　Fax : 03-3435-5979
e-mail : mail@abic.or.jp

【関西デスク】
〒552-0021 大阪市港区築港 2-8-24 pia NPO 4 階 403 号室
Tel & Fax : 06-4395-1188
e-mail : kansai-desk@abic.or.jp


本誌の著作権は発行者に帰属し、無断転載・転送することを禁止します。

政府機関関連への協力

# JICAシニア・ボランティア活動での副産物とは…？

進藤（しんどう） 武（たけし）（元 エスティーエートラベル）

2007年1月に現役を引退。桜の季節にJICAシニア・ボランティア（SV）募集の電車の中吊り広告を見つけた。早速、詳細確認のため広尾にあるJICA広場へ行くと、そこで聞かされたのが申請書類に添付する健康診断審査基準の厳しさであった。

血圧・血糖値に問題を抱える身としては、まずはジム通いからと生活習慣からの切り替えを図った。その苦労の甲斐があってか血液検査の数値も概ね基準値内となり、その年の11月に応募したのである。

しかし、試験に合格しても65日間の青年海外協力隊（JOCV）と一緒に受ける派遣前訓練の合宿が待っていた。福島県二本松市の訓練センターでの生活の1日は6時起床そしてラジオ体操から始まり語学や講座の研修と続き、夕食後は「宿題」が待っている。

消灯時間（23時）には各宿泊棟に見回りも来る。このような「軍隊」並みに時間で管理された生活は想定外であった。でもJOCVとの共同生活は年齢も肩書も関係のない横社会。長年の肩書社会で染み付いた垢を落とすにはまたとない機会であった。退職後は「素の自分」で生きていくという願いに歩を進めることができた感じがした。

そのお陰で「資格はSVでも気持ちはJOCV」となって2008年9月に任国ベトナムへ向かったのである。

**〈シニア・ボランティアの活動について〉**

派遣期間：2008年9月～2010年9月（2年間）

配属先：　ベトナム・ホーチミン市人民委員会観光局

活動要請内容：

1）日本の海外旅行マーケット（日本人旅行者の特徴等含む）をベトナムの観光業関係者に伝える。

2）新たな観光ポイント等の開発。

3）日本語ツアーガイドの質の向上を図るためのセミナー等の開催。

4）国際交流プログラム等の促進。

観光局アン次長（左）よりベトナム式のお歳暮を頂く

5）ホテル等への資格審査・経営へのアドバイス。

派遣前、知らされていた要請内容と着任後配属先で聞かされるモノとでは異なる事例もあると聞いていたが、ほぼ同じ内容の説明を受けまずはひと安心。むしろ気になる点は「素の自分」がベトナム人社会に受け入れてもらえるかであった。しかし、それも取り越し苦労であった。配属先のメンバーは「事務所内最長老」の私を何かと気遣ってくれて、居心地良く任期を全うすることができた。

帰国して数ヵ月が過ぎる。活動を通して知り合えたベトナム人、旅先での触れ合い、一緒に時を過ごしたJOCVの仲間たちとの語らい、そして60名を超す多くの友人たちがサイゴンに訪ねてくれたことなど、思い出は尽きない。友人の中にはベトナムの地に惚れ込み、日本語教師の資格を取りサイゴンで日本語教師として働き始めた者もいる。

60歳で現役を終え、ボランティアに応募を決めたのが2007年秋。それから3年が過ぎた。しかし、今の「気分年齢」は57歳に逆戻り、いやもっと若くなったかもしれぬ。私にとってSVの活動は「Priceless」の体験であった。

※ベトナムでの日常生活を通して気がついたことを書いたブログ。

「ベトナム食日記」http://gg-taberu.blogspot.com/

若くエネルギーを感じる国。
国民の平均年齢は約27才

青年海外協力隊員と11時間バスの旅で
最南端のカマウ岬へ

訪ねてくれた友人とベトコンが
掘ったクチ・トンネル・ツアーに

政府機関関連への協力

# タイの学生に日本企業文化を伝える

谷口 武彦（元 日産自動車）

ここ数年、タイの日系企業においては優秀な学生を新興の欧米また韓国、中国の企業に持っていかれるという問題に悩まされていた。タイを日本製造業の重要海外拠点として考えていた日本政府としてはこの状況に危機感を抱き、海外貿易開発協会（JODC）を委託先としてタイの大学生に日本や日本企業文化への関心、興味を持ってもらうための「日本企業文化講座」をタイの大学で開設するというプロジェクトを計画したが、この構想をABIC経由で聞いたのが始まりだった。

私自身は1989年来、二度にわたるタイ駐在を通じてタイのビジネスだけでなく文化、歴史、社会など多くのことを学び、自分のキャリアはタイ国やタイ人に支えられてきたという思いが強かった。それだけに昨年、第一線を退いた後は何かタイのためにできることはないかと日々模索していた。

タイスワナプール飛行場に降り立ったのは2010年6月初め、35度の暑さと共にむっとする湿気が容赦なく襲ってきたが、これから始まるチャレンジングな仕事への期待はそのような苦痛を吹き飛ばした。バンコックに到着した6月は、まだ赤旗グループ（タクシン派）による市中心部の爆破また占拠から日が経っていない頃であり、しかもアパートの所在地がランスワン通りというまさにそのグループが占拠していた地域ということで、緊張感は高いものがあった。

しかし、過去のクーデターが示している通り、政治的紛争と市民生活が切り離されているのがタイの文化であり、今回の事件も終わってしまえば何事もなかったように市民は毎日を過ごしているといった様であった。

「日本企業文化講座」はタイの6つの大学、すなわち、バンコックのキングモンクット大学、カセサート大学、地方のチェンマイ大学、コンケーン大学、スラナリ大学、ウボンラチャタニ大学を3人の講師で分担するというもので、私はキングモンクットとウボンラチャタニ大学での講義を担当した。

教材作成においては、プロジェクトの趣旨に沿っていれば原則講師の自由裁量に任されていたので、私の場合は経験上、モノづくり文化を理解してもらうことをその柱としながらも、それにとどまらずタイと日本の歴史的な接点また文化の違い、さらになぜ日本企業がタイを製造拠点化してきたかなどを盛り込んだ内容とした。この講座の目的は多くの優秀な学生の日系企業への就職促進であるが、私自身は、ともかく日本ファンを一人でも増やしたい、そして将来日本とタイの友好の懸け橋となれる人材育成の一助になることを考えながら、9月末まで講義を行った。

講義する筆者

タイにおける一週間の生活は規則正しく、月曜・火曜はキングモンクット大学、水曜・木曜は一泊でウボンラチャタニ大学へ出かけ講義を行い、週末は翌週の準備というものであった。

キングモンクット大学における受講生は80名、一方、ウボンラチャタニ大学では実に214名の学生が熱心に講義に出席してくれた。ビジネスマン上がりの私にとって大学で講義するのは初めての経験であり、当初はいささかの不安もあったが、毎回元気よく眼を輝かせ熱心に受講してくれている学生を見ていると不安は吹っ飛び、むしろ講師の方が元気づけられるといった状況であった。彼らの感想も「就職前に日本企業の話しが聞け、また日系企業でのインターンシップにも参加でき、日本企業のことがよくわかった。ぜひ日本企業に就職してみたい。」という大変前向きなものであった。

タイの学生は本当に真面目で日本企業文化講座という異文化への取り組みに熱心であり、それだけに講師としても大変やりがいのある任務であった。また一般的にタイ人はシャイで人前ではなかなかうまく話しができないと言われているが、私の印象では日本の学生よりもきちんと話しができると感じた。

2010年10月末に任務を終え帰国してからも、教え子たちが本当に日本を好きになってくれたか、またどれくらいの学生が日本企業に就職してくれるか気になる毎日である。

最後にこのような機会を与えてくれたJODCまたいろいろアドバイスをくださったABICの方々へ深く感謝の意を表するものである。

ウボンラチャタニ大学の学生たちと記念撮影

政府機関関連への協力

# 「タイ加工食品産業マネジメント」研修に講師として参加

渡邊（わたなべ） 春樹（はるき）（元 アサヒビール）

2011年1月18日から22日までの5日間、ABICの紹介で「タイ加工食品産業マネジメント」研修に(財)海外技術者研修協会（AOTS）からの講師として参加したので、感想を含めて報告する。

研修は、日本の経済産業省からの委託事業である貿易投資円滑化事業の一環として、AOTSが「泰日経済技術振興協会（TPA)」と協力して開催したものである。タイは農業国である強みを生かし、タイを「世界の台所」とするための食料品輸出政策を打ち出しているが、食品業界の食品安全管理の知識不足が問題となっている。そこで、加工食品に関する指導を行なう大学や研究機関の教育者、企業の管理者等に向けて、特に日本における食品の安全管理等の理解を深めることを目指して今回の研修を行うこととなった。

**1月18日バンコック到着：**まだ前日の雪が残る名古屋から予定通りバンコックへ到着、搭乗前後で約30℃の気温ギャップ。出口でAOTSの駐在者と会う予定だったが、1時間経ってもホテル関係者以外のそれらしい人がいなかったため、出口付近を捜したところ、迎えの列の後に私の氏名のプラカードを持った駐在者がおられ、やっと会うことができた。聞くと、ホテル関係者が迎えの列に入れてくれなかった模様。空港から市内のホテルまで駐在者が送ってくれ、無事チェックイン。

車中で、前日（研修は1/17から）までの講義の内容や通訳の情況を教えてもらい、翌日の講義の段取りを考えた。通訳はあまり慣れていない様子とのこと。夜、通訳対策を自分で考える。

**1月19日終日講義：**午前9時から休憩を含め、午前・午後の合計6時間の講義。受講生は42名。テーマは「ビール工場の品質保証」として、ビール製造工程の紹介を含めて、ビールの品質保証等について説明した。私が日本語で説明し、通訳がタイ語に訳す方式。パワーポイントでの発表は、受講者は英語も理解できるとの情報から、できるだけ英語の語句を使い、通訳の話を聞きながら英文字の画面を見てもらうことにした。また一方通行の講義にはせず、1時間に一度、質問を受け、受講者の理解を深めるようにしたところ、講義終了までに質問が20問以上もあり、食品の異物混入に関する質問が多かった。

**1月20日グループワークと工場見学：**午前はグループワークに変更になり、主催者の依頼で課題を私が提案し、「各社の製造標準書の情況と、製造記録の情況を出し合う」ことにした。6グループの構成だが、意見交換は活発だった。

午後は、大型バスに乗りバンコックの隣のパツンタニ県の食品加工工場を受講生と一緒に見学。そこで、現地講師のカセサート大学の准教授と合流。工場内の工程は、4Sも進んでいる状況だが作業人数の多さにびっくり。冷凍食品材料の作業のため無塵服と防寒服を着用した作業者が黙々と働く様子は、昔スパイ映画で見た秘密地下大規模工場の雰囲気だった。

**1月21日研修最終日グループワーク：**私の講義は後半だったので、前半の講師からの宿題もあるだろうと、主催者にグループワークの内容を聞くと、「あなたがやりたいように進めてほしい」との返事で、最後のまとめも私が担当になった。そこで私の講義の復習も兼ねて、「標準類のQC工程図を各グループで作成する演習」を課題として、作成の指導に当たった。

午後からは各グループが演習成果を発表したが、多くがメーカー現場の管理職なので実践的な良いプレゼンが多かった。カセサート大学の准教授が自分からコメントを買って出てくれ、それぞれのグループに良いアドバイスをしてくれた。私からは、「現場を強くすること」の大事さを強調したコメントを説明し、発表会を終了。私から全員に修了書を渡したが、氏名を読むのに苦労した。

今回の研修は、講義と実践演習を5日間に良いバランスで組んだ効果的なものと感じた。

1月19日 講義する筆者

1月20日 食品加工工場見学

プロジェクトの受託

# 多文化共生へ向けての定住外国人（ブラジル人）子女の教育

森 和重（中南米担当コーディネーター、元 三井物産）

2008年初めに32万人に達した“デカセギ在日ブラジル人”は、2008年の世界経済危機の影響をまともに受けて、派遣切りなどによる失業のため帰国者が増えて2010年年初には26万人に減少した。

その帯同家族の子供たちも帰国あるいは不登校・不就学に追い込まれ、その結果、約1万人の児童生徒を抱え100校前後あったブラジル人学校が生徒数半減しため、3割近くが閉校せざるを得なくなり、現在70校弱に減少した。もちろん、日本人学校へ転入した子供たちもいたが、大半は失業した親と一緒に家庭に引きこもり不登校・不就学になる子供たちも増加した。

## 定住ブラジル人の現状と子女教育の重要性

既に、本誌24号・28号で紹介しているが、ABICも2005年から三井物産のブラジル人子女教育支援プロジェクトの業務委託を受け、ブラジル人学校支援、2009年からは三井奨学金供与を実施している。

さらに、文科省が、2009年から3年間の緊急プロジェクトとして、不登校・不就学子女の子供たちが日本の公立学校へ円滑に転入できるように日本語教育を中心とする「虹の架け橋教室」委託事業を公募した。ABICは当初から参加し、2011年12月までの第4次プロジェトの認可も受け、茨城県つくば市および常総市でブラジル人学校2校と提携し2教室を運営している。既に数名の生徒を公立学校にも送り出した。

しかしながら、現に在住するブラジル人はほとんどが定住化志向であり、既にその居住地では認識の有無にかかわりなく地域社会の構成員として存在している。また、その子供たちの大半は数年後には、地域社会の一員として参入するのは間違いない。従って、その地域社会にとり、十分な教育を受けず適切な社会性を身につけていない人材が参入した場合、地域社会のリスクになり、将来大きな社会負担になる恐れがある。

## 多文化共生への道筋

解決策としては、定住外国人との多文化共生を目指し、その地域社会が外国人との交流通じて相互理解を深めることが必要と考える。

既に多数の外国人が居住する集住都市では、その取り組みが大幅に進んでいるが、地域社会との交流を目的の一つとする「虹の架け橋教室」（以下「虹の教室」）の運営を通じて感じたことは茨城地域として更に積極的に取り組む分野があるやに思えた。従って、支援を継続しているブラジル人学校および「虹の教室」を通じて、地域社会との交流の緒を探るべく、昨年から茨城県庁、つくば市役所、常総市役所、大学、地域商工会、関係NPO法人などとの交流の可能性を昨年から打診を始めた。

虹の架け橋教室 常総教室で学ぶ児童

対象となるプロジェクトとして、**①外国人子女への日本語教育の強化（「虹の教室」終結後）、②ブラジル人学校児童の健康診断、③ブラジル人学校・日本公立学校卒業後の青少年の職業教育（職育）**を取り上げた。

既に、上記のプロジェクトの内、いくつかは具体化しつつあるので、現状について、概略説明したい。

### 1. ブラジル人学校の学童健診

ほとんどのブラジル人学校は教育法上私塾扱いであり、日本政府、地方自治体の管轄外にあり、設立後十数年経っても定期的な学童健診などはほとんど行なわれていない。従って、日本公立学校で感染症（結核、インフルエンザなど）対策を進めても、ブラジル人学校が放置されている限り、リスク対策が万全とは言えない。そのための取り組みとして、下記を実施した。

（1）常総市でのブラジル人学校での健診（2009年10月）
防衛医大学の外国人健康診断調査事業の一環として、ブラジル人学校の健康診断を進めるべく対象校を探していたので、支援先の「エスコラ・オプソン校」を紹介し、慶応大医学部と一緒に後援を行ない、実施に協力した。（事務処理、通訳など）

（2）文科省「外国人学校の子供の健康診断の調査研究委託事業」
文科省にて平成21年度に群馬県で実施したが、平成22年度について2009年3月に同様の取り組みの可能性について打診があった。慶応大医学部と検討の上、従来の支援校のつくば市１校（エドカーレ校）と常総市3校（オプソン校他2校）の2ヵ所で実施することで文科省の同意を得て、委託事業として認可を受けた。

学童健診の採血風景（初めての採血に不安気味）

右から筆者、ボランティアで参加の地域医師（80歳）と日系ブラジル人の医療通訳

本プロジェジェクトの特徴は、ABICが受託者として、文科省、茨城県庁（国際課）、つくば市役所、常総市役所、つくば保健所、常総保健所の公的機関関係者、民間団体として慶応大医学部、防衛医大、東京女子医大、労働衛生協会、ボランティア地域医師団、看護士、医療通訳、地域NPO法人、学生（筑波大、上智大、東外大など）の官・民の関係者数十人が一体となって、ブラジル人学校との交流も含め、実施したプロジェクトである。これが、今後の外国人学校の児童検診のモデルになることを期待している。

※つくば市の学童健診（内科、歯科、視力・聴力、Xray検査など）：2009年12月4日実施。参加者：文科省、県庁、市役所、保健所、医師団、看護士、検査士、通訳、ボランティアなど40数名。健診対象者60名。

※常総市の学童健診（同上）：2011年1月29日実施。参加者：同上60数名。健診対象者80名

**2. 筑波大学「職業教育（職育）プロジェクト」**

ブラジル人学校・日本公立学校を卒業しても、日本語能力不足・家庭の事情などで進学できない不就学の青少年や就学中でも日本語教育、職業能力教育を必要とする子女が増加している。これらの青少年は、社会から孤立し、社会的向上心や自立心を養う機会も少なく、将来のキャリア・パスを描けずにいることが多い。

これらの子供たちを日本の社会に適応させるため、大学・自治体・商工会・NPO法人などが連携して「職育」の体制造りが必要である。筑波大学と話合い、大学内に関連プロジェクト「定住化外国籍児童に対する職育プログラム」を立ち上げてもらい、ABICも県庁、市役所、地域NPO法人などと一緒に参加している。

その第一弾として、2月10日に筑波大学で、エドカーレ校（つくば市）とオプソン校（常総市）の中・高生約100人を招待し、「ワークショップ：教育とキャリアによる夢の実現に向けて」を開催した。大学生による大学紹介、5名のブラジル人留学生による自分のキャリアと後輩に贈る言葉などが語られ、子供たちは目を輝かせて聞いていた。引き続き、地元企業とのタイアップなどによる職業紹介も兼ねたこの種のプロジェクトを推進する予定である。

筑波大学での職育ワークショップ風景

**3. ブラジル人子女への日本語教育の強化プロジェクト**

既に上記職育プロジェクトの一環として、筑波大生による日本語教育支援が行なわれているが、さらに日本語能力の向上を望むブラジル人子女（ブラジル人学校または日本公立学校に通学している生徒）に対し、本年4月から文化庁の「日本語教室」の開講を目指し応募中である。

将来的に労働力不足が予想される日本は外国からの優秀な人材の受入れが必要とされている。既に在日する2.5万人もの日系ブラジル人子女はその人的資源の一つであり、日本語・ポルトガル語のバイリンガルとして将来の資源大国で日本の重要なトナーであるブラジルと日本の架け橋となる得る子供たちに十分な教育機会を与えることが最重要課題と考える。

健診終了後の参加医師団、介護士、通訳、事務局の交流会

教　育

# 「アジアの中の中東ー経済と法を中心に」の研究成果報告会
# なぜ今、中東なのか？ー日本・中東・世界

谷川（たにがわ） 達夫（たつお）（大学等講座担当コーディネーター、元 住友商事）

2011年1月18日にABIC主催のフォーラムが、日本貿易会6階大会議室で61名の出席者を迎え開催された。開会の辞として市村理事長から、このフォーラムの目的やプロジェクトの意義について次のような説明があった。

この研究プロジェクトは文部科学省が推進している「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」に2006年に採択されたものであり、ABICにとっても大変意義のあるものである。

その理由の第一は、アカデミックな領域との共同案件である。ABICは40以上の大学で会員が講義を行なってきている。これに加えて、いくつかの大学と学術交流協定を締結して共同で活動し、その成果を出版したりしているが、このプロジェクトは後者の代表的なケースの一つである。一橋大学の加藤博教授を研究代表者とするこのプロジェクトチームは、文部科学省への申請書の中に協力者としてABICを入れて提出し採択された。これはABICとして非常に嬉しくまた名誉なことであり、プロジェクト開始から一貫して協力しまた努力してきた。

理由の二つ目はこのプロジェクトの意識調査に協力・参画した会員（延べ200名以上）の数の多さとそのグローバルな広がりである。中東および中東以外のイスラム教国に昭和50年代以降に駐在した経験を持つビジネスマンの組織だった調査ができたことは、まさにABICは人材の宝庫であると言われていることを実証している。また現在の駐在員の調査に対しては現地日本人会と共に商社の本社・現地の関連部門のご協力を得た。日本との関係において、ますます重要性を増す中東について、この研究が行なわれていることは大変意味のあることである。引き続き我々が問題関心を持ち続けるために、報告会を企画したとの挨拶があった。

当日（1月18日）は14日にチュニジアで政権が崩壊した数日後であり、この余波が中東に波及するのではないかとの予感を持たせる雰囲気の中であった（結果として1週間後の25日からエジプトでデモが発生し2月11日にムバラク大統領が退陣し、そのほか多くの国で改革を求める運動が続いて起こったことを考えると、大変時宜を得たフォーラムであった）。

加藤一橋大学教授

続いて研究代表者の加藤教授より、「アジアの中の中東」プロジェクトを終えるにあたって、という報告があった

なぜ中東なのかという点については、前近代に中東が「称揚」されたが、近代になって「無視」された。しかし、その後現代のグローバル化の世界の中で中東が台頭してきたことが背景にある。「アジアのなかの中東」研究では、西欧対アジアの二項対立を乗り越える視覚を持つことが目的である。またなぜ日本人にとって中東イスラム世界は「遠い」のか、この状況を克服するために何をすべきかについては、直接的な接触と恒常的な対話を促進する必要があるとのお話があった。

二番目の報告として、本プロジェクトで意識調査を担当した筆者より、調査の概要と目的、調査結果として赴任時期によって差が見られる駐在員の意識について報告した。

中東やイスラムは遠い存在である日本人の中で、現地で交流や接触した駐在経験者の現地社会やイスラムに対する好意度は確実に上がったと言える。また駐在先社会への不安や心配は、イラン革命や湾岸戦争を分岐として、

筆者

変化していることも明らかになった。詳しい調査結果は、http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/ の中に、「中東に駐在経験を持つビジネスマンの意識調査」「中東以外のイスラム教国に駐在経験を持つビジネスマンの意識調査」というリサーチレポートとして収録されている。またABICインフォメーションレター No.19、23、25と日本貿易会月報No.666にこの意識調査に関する筆者のエッセイが掲載されている。

臼杵日本女子大学教授

最後に、臼杵陽日本女子大学教授に、「アジアの中のイスラム—アジア太平洋戦争期（1931-45年）におけるイスラム研究と大川周明」という講演をいただいた。

まず、日本のイスラム研究が1973年の第四次中東戦争時の石油ショックのように戦争という契機で発展してきたことを指摘して、日中戦争勃発後に中国のイスラム教徒を国共合作と対抗するために政治的に利用するためにイスラム研究推進の必要性が叫ばれたことが指摘された。次に、戦時期日本を代表する大川周明のイスラム研究に焦点を当てて、スーフィズムに関心を持った青年期、ジハード論を強調する壮年期、そして預言者ムハンマドの崇敬とコーラン翻訳に没頭する晩年に分けて、大川にとってイスラムとは何だったのかを再検討して、大川を21世紀の現代において改めて位置づけ直す必要性があることが述べられた。多くの参加者から、大変興味ある講演だったとの感想が寄せられた。

## 教　育

# アジア経済研究所開発スクールでの講義

2010年秋、ABICは、ジェトロ・アジア経済研究所付属の開発スクール（Institute of Developing Economies Advanced School, 略称:イデアス（IDEAS））の講義を、初めて請け負うこととなった。開発スクールは、経済協力・開発援助の現場において、高度な専門性を持って活躍できるエキスパートの育成を目指して、1990年より実施されている研修事業である。2010年度の受講者は、アジア12ヵ国からの研修生14名と、日本人研修生15名から成る。外国人研修生はすべて、母国の期待を担って派遣された若手官僚だ。

講義する辻会員

ABICが受け持つのは、「国際貿易、投資、金融」に関する6コマ、「資源問題」に関する2コマ、「エネルギー問題」に関する2コマの計10コマで、それぞれをABIC活動会員の辻 哲彦（元 住友商事）、楠井裕章（元 兼松）、宮本正明（元ジャパンエナジー）の3氏が受け持つこととなった。講義はすべて英語で行なわれる。

2010年10月5日に入学式が千葉市幕張の同スクールで行われ、研修生、来賓、講師など関係者86名が出席。日本人研修生は英語で、外国人研究生は覚えたての日本語で自己紹介をするなど、式は和やかな雰囲気の中で進められた。その後行なわれた懇親会では、これから始まる研修への若い人たちの意気込みが会場に溢れていた。

ABIC派遣講師たちの講義は、12月初旬に始まり、1月末で無事終了した。予想に違わず、研修生たちの多くが熱心な受講態度に終始し、質問内容はかなり高度なものも多く、双方向性のある活発な講義を展開することができた。

多くの研修生は向学心に富み、知識レベルは高い。ただ実務の経験が少ないため実践的知識が乏しく、実務経験豊富なABIC派遣講師の行なった講義は、研修生の未知の分野を拓く、興味深い内容であったと思われる。また出身母体や専門分野が多様であることから、研修生間の知識レベル、問題意識、関心分野が分散する傾向があり、講師たちが講義内容の設定度合いに苦心する部分もあった。

今年度の経験を踏まえ、来年度はさらに充実した講義を提供できればと思う次第である。

（大学等講座担当コーディネーター　布施（ふせ） 克彦（かつひこ））

教　育

# 埼玉県加須市立北川辺東小学校で国際理解講座を開講

2010年5月埼玉県加須市立北川辺東小学校から国際理解講座の問合せを受け、同校に池田善弘校長を訪ねた。自然体験活動、フランスの小学校との文化交流、夏休みのサイエンス・スクールなど特色ある教育活動を積極的に取り入れている池田校長の国際理解教育に対する熱い思いを汲み、ABIC会員2名による授業を提案、（財）日本経済教育センターの協力を仰ぐことにした。

2011年1月19日5年生2クラスの総合的な学習の時間で西村嘉市会員（元トーメン）がブラジル、関口昌甫会員（元日本無線）がインド・中近東の授業を担当した。

その後、全校朝会で池田校長が西村会員の授業に触れ、「日本人は嘘をつかない」というテーマで講話したことが2月2日付の東小学校だよりに掲載された。（以下、東小学校だよりから抜粋）

「5年生は、インドとブラジルについて、それぞれの国で活躍された元商社員の方から話を聞きました。話を聞いてとても面白かったし、いろいろなことがわかりとてもよかったです。今日の朝会では、その中で特に印象に残っている話を、ひとつだけ皆さんに紹介したいと思います。それは、ブラジルについての西村さんという方の話です。」

「ブラジルについて西村さんは、こんな話をしていました。『ブラジルでは日本人が世界一尊敬されています。世界にはいろいろな国がありますが、ブラジルほど日本人を尊敬する国はありません。その理由は、日本人は正直で嘘をつかない（とブラジルの人たちが思っている）からです』私はその話を聞いて、なにかとてもうれしくなりました。」

「『ブラジルは貧富の差が激しく治安も悪い。でも日本人が尊敬されているブラジルに一度は住んでみてほしい』と西村さんの言葉からは、『今の日本の人が失ったり忘れてしまった大切なものをブラジルで見つけてほしい。そして東小の子どもたちは人に信頼される人、尊敬される人になってほしい』という願いが感じられました。」

以下は、講師を務められた西村会員と関口会員から寄せられた講師体験記である。

（国際理解教育担当コーディネーター　川俣（かわまた） 二郎（じろう）、角井（かくい） 信行（のぶゆき））

## 「ブラジルについて」
## ―ブラジル社会で一番尊敬され、信頼されている日本人―

西村（にしむら） 嘉市（かいち）（元 トーメン）

2011年1月19日は寒い朝であった。川崎の自宅から2時間ばかり、埼玉県の北の端、利根川を越えたところに、加須市立北川辺東小学校がある。今年、改築された校舎は明るく、廊下、階段は広く木製で、のびのびした感じが受け取れた。

池田義弘校長は、朝からの会議があるにもかかわらず、われわれの講座のために会議をキャンセルされ、待っていてくださった。校長先生から、東小学校で行なわれている国際理解教育について熱心な説明があり、4年生はペルーとネパールの人たちから、5年生は各国で活躍した人たちから話を聞き、6年生は直接海外と交流（ネットを通じて）するなど、興味深い授業を行なっておられることが伺えた。

今回は、5年生2クラス各25名に、教科書、旅行、報道などで知ることができない生活経験、実体験、日本の生活習慣との相違点など（恵まれた日本の中で時として夢や希望をふくらますことのできない子供たちに生きる意味や夢や希望を持つことの大切さを伝えたい）をテーマに講座をしてほしいと

依頼があり、私は「ブラジルについて」の授業を担当した。

ブラジルは、国土も人口も大きな国、水資源が豊かな国、BRICsの中でも最も有望の国、エネルギー、鉱物資源、食料が豊かにある国、世界有数の工業国など説明するアイテムはたくさんあるが、小学校5年生の生徒がまず思い出すのはやはりサッカーで2014年サッカーワールドカップ、また2016年夏季オリンピックが予定されており、スポーツの興味は尽きないものと思われる。

しかし、忘れてはいけないことは、日本から一番遠い国にもかかわらず、2008年に移民100週年を迎えたことである。1908年に笠戸丸がアフリカ経由ブラジルに渡ってから100年が過ぎ、日系人約150万人が生活するブラジル、

日系人はどのように生きてきたのか、どのような生活をしているのか、日系移民のブラジルにおける生活をしっかり見てほしいと考え、都会ではなく、サンパウロ市から西北約550km離れた日系移民が多くいる地方都市のブラジル人の生活、特に日系ブラジル人の生活の話をした。

都会、日本への出稼ぎ、高等教育を受けるために家を出るなど、町は年寄りと子供の町となっているが、家族の集まりを大事にし、年寄りの日、母の日、こどもの日など日本の風習を守り、日本の食事をとりながら、皆で助け合って生活をしている。現在、ブラジルでは、勤勉さや教育程度の高さから、政界、官界、経済界で活躍する人、医師、弁護士、教員など専門的職業に就いている人が目立つ。

ブラジル社会において日本人は一番尊敬され、信頼されている。他の友好国ではないことで、これは日系移民が真面目で勤勉実直に仕事をしてきたからである。日本人は正直で嘘をつかないからである。

ブラジルは、気候が悪い地域もあり、貧富の差が激しく治安が悪い国ではあるが、多民族国家で、人種差別、宗教間の争い、政治抗争などがない国である。しかも日本人が最も尊敬されている友好国である。日本から一番遠い国であるが、旅行などではなく是非とも住んでほしいと、声を大きくして訴えた。

拙い話を静かに聞いてくれた50名の優しい子供たちの中から、きっとブラジルで住む子供が出て来ると信じている。

## 「世界大発見」
## ―子供たちに日本の良さと夢と希望を―

関口（せきぐち） 昌甫（まさとし）（元 日本無線）

ABICより「世界大発見」というテーマで、北川辺東小学校の生徒たちに生きる意味と夢や希望を持つことの大切さを伝える出前授業をして欲しいとの依頼があった。

近頃はわが国も深刻な社会問題が多く、将来を考えると安閑としてもいられない状況である。しかしながら、日々の食料や水を得るために苦労している途上国の人々や、戦争や内乱で明日の保障さえない子供たちと比較すると、日本のモノの豊富さ、自然の美しさ、長い歴史と独自の多様な文化、そして何よりも半世紀以上も平和を享受している我々はいかに恵まれた境遇にあることか。いささか元気がないように思われる最近の子供たちに日本の良さを知ってもらい「希望を持って頑張れ！」とエールを送りたい思いでお引受けした。

その際、まず私の頭をよぎったのは、“日本人は水と安全はタダだと思っている”という学生時代から知っている言葉であった。日本生まれのユダヤ人とされる作家のこの言葉は、自分の長かった海外経験を振り返ると今更ながら至言だと思っており、その真意を国際理解教育の場で訴えることにした。

レジュメの作成で苦心したのは、小学5年生の国際理解への程度と興味のあり様の把握であった。配布資料として、演題どおり「世界大発見」と名付けた日本とインド、中国、イラク各国の基本的なデータの分りやすい比較表、また飽きないよう“世界三大ナントカ”と俗称する世界の代表的な三つの事物の紹介を小学生向けに準備。“三大ガッカリ”なる観光名所があることを知って思わず苦笑、教材を作りながら改めて自分も学び、発見も多い作業を

楽しんだ次第である。

予め学校で準備していただいた世界地図を使いながら自分が駐在した各国で見聞した「日本人が常識と思っている事は、世界では必ずしも通じない。逆に、外国での当たり前は日本では非常識な事もたくさんあること」など、身近な日常を例に挙げてその違いを語った。はしやフォークを使わずに指でご飯を食べる人たち、貧しさゆえに路上、駅のホーム、果ては、橋の欄干の上で寝る人々の存在、用便の後で紙を使わない国々も多いことなど、異国の習慣や衛生観念の多様性を披露した。

5年生50人を2クラスに分けて2回の講義をした。生徒たちが興味を持つような小道具としてアラブ風俗の人形、外国の珍しい紙幣、特にインドのいくつもの公用語が印刷されたお札等、聖書やコーランそして毛沢東語録、さらにはインドの神々の細密画や写真などを持参、説明して回覧した。外国へ行った経験のある生徒はわずかだったが、「これが何だか分る？」との問いに挙手して答える生徒も何人かいた。

二番目のクラスでは、『少年老い易く学成りがたし。一寸の光陰・・』の漢詩を黒板に書き意味を説明した。「時の経つのは速い。だから、後に悔いることがないよう今を大切に」という私の励ましのメッセージが子供たちの心に

届いていれば幸いである。

この世界には救いようもない貧困が存在していること、水と平和の大切さ、さらに日本人として生まれた幸せを充分認識し、感謝するように訴えたかったが、伝えたいことの多さに比べて45分の授業2コマでは十分に意を尽くせずいささか心残りでもあった。

校長先生を交えての懇談で、生徒の国際理解を深めるべく日頃から尽力されている積極的な姿勢には敬服させられた。明治からの長い伝統を持つ北川辺東小学校に招かれ授業をさせていただいた機会は大変有難く、得がたい経験だったと感謝している。

## 留学生支援

# 東京国際交流館での書き初め指導

2011年1月16日（日）、70ヵ国からの留学生や研究者とその家族1,000名が住む東京国際交流館では、正月や冬の季節にちなんだ遊びやスポーツプログラムの行事が開催された。

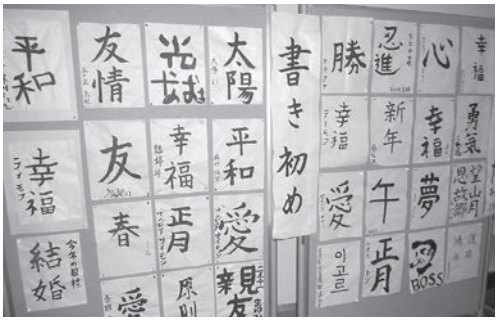
餅つき、凧作り、凧揚げ、羽根突き、色々な正月遊び、駅伝など、これまで行なわれた種目に2011年は書き初めが加わったため、特にABICの書き初め指導が要請され、ABICのボランティア講師や留学生支援グループの担当コーディネーターが参加した。また普段の日本語授業を通じて留学生や家族と交流している日本語講師も参加した。

今回の書き初めはかなりの人数の参加が予想され、定例の書道教室の講師一人では対応しきれないとの判断でABIC会員に呼び掛けて、書道師範や書道指導に実績のある川嶋則男（元 日商岩井）、小峯征三郎（元 海外経済協力基金）、遠藤眞喜子（元 三井物産）のお三方にも参加いただいた。

当日は予想をはるかに上回る100名近くの留学生や家族が押し寄せ、用意した16席は常に満席で順番待ちが続く大盛況で、みんなが熱心に講師の指導の下に書道を楽しんだ。立ちっ放しで4時間に及ぶ指導に当たられた講師の方々は疲れる暇もない様子で参加者との交流を楽しんでいた。

書き初め参加者のうちの15名から、定例の書道教室参加の申し込みを受けた。

（留学生支援担当コーディネーター　田中 武夫（たなか たけお））




## 事務局だより

### 国際協力キャリア総合情報サイトの紹介

ABICでは国際貢献活動の一環として(独)国際協力機構（JICA）事業との協力関係を築いており、会員の中には長・短期の専門家並びにシルバーボランティアとして活動されている方もおられます。

協力関係をさらに推し進めるべく、2011年よりJICA国際協力人材部の国際協力人材センター (PARTNER)のホームページにABICのホームページをリンク頂くことになりました。是非一度アクセスして下さい。

PARTNERホームページには国際貢献活動の求人並びに各種研修・セミナーの情報も掲載されております。

http://partner.jica.go.jp

# 会員入会のお願い

国際社会貢献センター（ABIC）の活動にご賛同頂き、会員として資金的援助をしていただける個人の方や企業、団体のご入会をお願い申し上げます。

| 種類 | 内容 | 年会費 | | |
|---|---|---|---|---|
| 正 会 員 | センターの活動を推進する個人、法人及び団体。（理事会の承認を得て入会） | 法人及び団体 | 一口 | 50,000円 |
| | | 個人 | 一口 | 10,000円 |
| 賛助会員 | センターの趣旨に賛同し、会費を納める個人、法人及び団体。 | 法人及び団体 | 一口 | 10,000円 |
| | | 個人 | 一口 | 5,000円 |
| 活動会員 | センターに登録し、センターの事業に参加しようとする個人。 | 不要 | — | — |

## 正 会 員

**団体・法人（17社）〈社名五十音順〉〈10口〉**㈳日本貿易会　伊藤忠商事㈱　住友商事㈱　双日㈱　豊田通商㈱　丸紅㈱　三井物産㈱　三菱商事㈱　**〈４口〉**㈱日立ハイテクノロジーズ　**〈２口〉**稲畑産業㈱　岩谷産業㈱　長瀬産業㈱　阪和興業㈱　**〈１口〉**協同木材貿易㈱　興和㈱　JFE商事ホールディングス㈱　蝶理㈱

**個人（9名）〈入会順・敬称略〉**　池上　久雄　寺島　實郎　小島　順彦　宮原　賢次　吉田　靖男　岡　素之　佐々木　幹夫　勝俣　宣夫〈3口〉　小林　栄三

## 賛 助 会 員

**法人（3社）**　**（社名五十音順）**

㈲イーコマース研究所　㈱エックス・エヌ　キーリサーチネット㈱

**個人（437名）**

**下記は2010年11月以降にお申し込み頂いた方です。ご協力に深謝申し上げます。**　**（敬称略・氏名五十音順）**

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 〈２口〉 | 古知　屋順 | | | | |
| 〈１口〉 | 遠藤　眞喜子 | 大橋　幸多 | 織辺　重之 | 金子　和夫 | 倉本　泰信 |
| | 柘植　幸弘 | 辻　哲彦 | 中嶋　鴻明 | 疋田　和三 | 日向　精義 |
| | 宮本　正明 | 山路　裕之 | | | |

## 活動会員　2,100 名　（2011 年 2 月末現在）

会員入会のお問い合わせ・連絡先

**特定非営利活動法人 国際社会貢献センター（ABIC）**

〒105-6106 東京都港区浜松町2－4－1　世界貿易センタービル6F　㈳日本貿易会内

TEL：03-3435-5973　FAX：03-3435-5979　E-mail：mail@abic.or.jp